

# 路上は、社会が抱える問題の坩堝<sup>るっぼ</sup>

## ―東日本大震災、復興労働、コロナ禍…生活者の変遷―

特定非営利活動法人 仙台夜まわりグループ 理事 青木康弘

NPO法人仙台夜まわりグループは、今から約20年前の2000年1月に、夜の巡回(夜まわり)から活動をスタートしました。

厳寒の仙台的路上で、毎冬10人以上が凍死、衰弱死をしている現実があり、自分たちの足元で、これ以上悲しい出来事が起こらぬようにしたいとの思いからでした。

当時の仙台市長は、テレビのインタビューで「仙台市内にはホームレスはいないから施策を講じるつもりはない」と語っていました。が、実際の夜まわりで、300人以上の路上生活者を確認し、それ以後毎週実施することになりました。当初3人で、木曜日の夜8時から夜中の3時まで仙台市内を巡回しました。出会った



深夜 JR 仙台駅構内で

300人近くの路上生活者にホッカイロを手渡し、体調がすぐれない方がいたら、救急車を呼んで病院に搬送してもらいました。夜まわりを毎週繰り返すうち、当事者たちとの関係が深まり、彼ら彼女らの切なる要望に応える仕方で、週一の夜まわりから始まった活動は、炊き出し、セミナー・食事会、大人食堂、シャワー・洗濯機提供、有償清掃活動、深夜夜まわりなど多岐に渡るようになり、現在、一緒に活動を担ってくれる仲間たちや支援者は1000人近くにもなりました。

### ◆2011年3月11日午後2時46分

今から10年前、東日本大震災が発生しました。仙台市内もライフラインがストップし、また、情報が錯綜していたため、被害の甚大さを地元の私たちが正確に知るのはずと後のことでした。震災直後に理事会で確認したのは、どのような状況であろうと路上生活者支援は継続すること、これまでのノウハウを最大限に生かし被災者支援を行うこと、

の2点でした。それ以降、路上生活者支援活動と並行して、被災者支援の炊き出し、孤立した地域への物資配送、避難所での炊き出しなど、備蓄していた物資を全て用いて、岩手県、宮城県、福島県の沿岸部の支援に奔走しました。

それら私たちの活動を一番理解し、協力を惜しまなかったのは、路上生活者たちでした。500人以上のカレー作りを引き受けてくれたり、被災者への炊き出しで誘導をしてくれたり、故障した車の修理をしてくれたり、それぞれの得意分野を発揮し協力してくれました。支援する側とされる側の枠組みが取っ払われ、「屋根のある人もない人も一緒に生きる」との真実を体験したのです。

### ◆10年で大きく変わった路上の状況

あれから10年、思い起こすと、仙台市内の路上の状況も大きく変わりました。震災前の仙台市内の路上生活者は、「50代後半から60代前半、東北出身」という一つのパターンがありました。

しかし、震災後数年、復興関連の仕事求めて全国から稼働年齢層が殺到した結果、仕事が見つからなかったり、雇用止めで住まいを失う人たちがいて、仙台市内の路上生活者の平均年齢は40代後半と、震災前より10才

以上も若くなりました。また、福島第一原子力発電所事故後の除染作業のため、たくさんの人たちが福島にやってきましたが、5次、6次下請けで働く人たちの一部は、自分の放射線管理手帳を見たことすらないという、雇用側のずさんな管理体制が明らかになりました。除染作業終了後、仕事を求めて福島から仙台に流れ込み、仙台市内で路上生活をせざるを得なくなった彼女らが訴える「被曝」の不安に対応するため、医療機関の協力で、ホールボディ・カウンター測定や、甲状腺総合検診を実施しました。

#### ◆コロナ禍の今

2020年3月から路上の様子がさらに変わりました。20代、30代の若者たちからの相談が増えたので、「長期に渡ってネットカフェに滞在し、派遣の仕事をしてきたが、次の仕事が決まらな



炊き出し(2021年1月1日)



越冬支援食料配布に並ぶ(2021年1月1日)

まった。どうしてよいかわからない」派遣先が決まっていたが、急に取りやめになってしまった。若年層からこれほどまでに相談が舞い込むのは初めてのことです。彼ら彼女らに共通したのは、「コロナ」というキーワードでした。それ以来、現在に至るまで、新型コロナウイルス感染症の影響で、職と住まいを失う人たちが毎月行っているアンケート調査でも、この間、多くの人たちが、コロナ禍による影響を受け、路上生活に陥っている事実が明らかになっていきます。

この間、互いに疑心暗鬼になり、人と人の関係が引き離されていく、そのような風潮の中、一番肩身の狭い思いをしている路上生活者のため、できる限りの感染防止策を講じながら、現在も、通常通り支援活動を継続しています。

#### ◆「公助」によるセーフティネットを

路上は、社会が抱える問題の坩堝であり、社会を映す鏡です。2008年のリーマンショックしかり、11年の東日本大震災しかり、そして今回のコロナ禍しかり、一番弱くされている人たちにその皺寄せが行き、命の危機に晒されているのです。

「自助」「共助」「公助」のうち、「自助」「共助」だけが強調される昨今、しかし、このような時代だからこそ、「公助」を最大限用いる必要があると思います。

誰もが捨て置かれないセーフティネットの構築に向けて、今後とも、政策提言や支援活動を継続していく所存です。

※参考 同会「みんながホームレスになってー子どもたちの笑顔に励まされながら」本紙94号 2011.10.1

【連絡先】仙台市宮城野区宮千代2の10の12

tel・fax 042-783-3123

E-mail: yomawari@medialogo.com

http://www.yomawari.net